
阿修羅の内乱

狐紹狸屋ころり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

阿修羅の内乱

【Nコード】

N6991P

【作者名】

狐紹狸屋ころり

【あらすじ】

「お嬢さん、あなたはここじゃない世界の、とある国の、王女だ」記憶喪失故に孤独の生活を送っていたそのうゆめ蘭生夢は、1人の少年と出会う。少年の名前はやみがらす闇硝子。蘭生夢を王女と言い、変なことを口走る彼だったが、次第に自分の中で彼の存在が大きくなっていくことに気づく。文化祭で彼が来てくれたことに驚く蘭生夢だったが、半ば喜び、初めて幸せだと感じつつあった。だがしかし、その文化祭の日、事件は起こった。闇硝子は何者かに殺され、死んでいたのだ。

0. プロローグ（前書き）

※プロローグを書きなおしました。

この小説は暴力的性的な表現を多く含みます。気をつけてお読みください。

0. プロローグ

体育館のような広さの白い部屋に、僕は居た。そして、彼女も。黒い髪を肩まで伸ばし、白い肌を持つ彼女は、とてもかわいらしかった。そして、悲しい顔をしていた。

『これが、私の言っていた、みんな、よ。みんな生きてるわ。ちょっと変わった姿だけど』

そこは、特殊な性癖の男どものための、サーカスだった。

壁に埋まった子供、天井から逆さに吊るされた子供、椅子に縛られた子供――みな、もちろん身動きとれず、辛うじて局部は隠れるようなボロを纏っていた。

僕は、言葉にできなかった。

『君は、どうして、助けを呼ばなかったんだ』

彼女はうつむく。

『助かるわけではないもの。ここは地獄よ』

『助かるよ！　僕がいる。僕が君の、君たちの、絶望を吸い取ってあげる』

だから、もう絶望しなくていいんだよ、と訴えた。

彼女は、その時初めて笑みを見せた。僕はほっとした。

僕の力さえあれば、彼女を救える。彼女は幸せになれる。

だが、僕は油断していた。

彼女の手には、黒い、拳銃が握られていたことを。

『私を絶望の淵から、救ってくれるのでしょうか？　だったら――』
いけない、と僕は叫んだ。

『私を、殺して』

闇硝子は飛び起きた。

悪い夢を見ていた気がする。よく覚えていないが、酷く救いよう

のない夢を。

寝汗をたくさん掻いた体はべた付き、背中には滴となったそれが随分と長い間伝っていた。

はあはあ、と荒い息をつく。とても気持ち悪かった。吐き気がした。

何が気持ち悪いかといえば、この状況もそうなのだが、先刻の悪夢はまるで世界中の憎悪をかき集めたような不気味な夢だったからだ。背筋が凍るような思いをした。

体中にそれが渦巻いているようで、物凄くだるく感じた。

小気味いいノックの音がした。しばらくしてガチャリとドアを開け、誰かが入ってくる。

闇硝子はベッドから起き上がらずに、そいつを渋い顔で向かい入れる。

「よう。まだ寝てたんか」

ドアから半身をひよっこり出したのは、闇硝子の知り合い、というか共同生活をしているビルという男だった。

「お前大分うなされとったが、どした？」

詛りを大分含むビルの声はどこか嬉しそうでもあった。

というか、顔がにやついていた。

「まさか寝る間を惜しんでまであの貸したビデオを見てたんか」

「違う！」

最悪な会話だった。

「ちょっと悪い夢を見ただけなんだよ」

うるさかったろ、と謝った。

ビルはさあ、と肩をすくめて、ニヒルな笑みを向けた。

「そいや、今すっげえニュースが放送されてんぜ。エルディア王が自殺して、エリア王女が逃亡中だってよ！」

闇硝子は言葉を失った。

すぐさまベッドの隣にあるラジオをつけると、確かにどの局も臨時でその事件が放送されていた。

ある局では、口を捲し立てて文法もめちゃくちゃ、ただそこにある更新され続ける情報をひたすら読み上げるアナウンサーは、まるでタイムセールのおっさんのようであった。まるでこちらにまで唾が飛んできそうなくらいだ。

嵐のようなすさまじい情報量に、思わず電源を切った。

「本当のことなのか……？」

信じられない、と言ったように茫然とビルの顔を眺める。

「ああ、そうみたいやね」

その言葉を聞くか聞くまいかで閤硝子は勢いよくベッドから飛び出し、服を着替えて外に飛び出た。

丘の上にある我が家からの眺めはすさまじく良い。爽やかな風と、そして故郷の全貌を見渡せる。

また、海を望むことができ、点として見える何隻かの白い貿易船が浮かんでいた。

何一つ変わらない、穏やかな日だった。

確かに王というものはや何の権力も持たないお飾りだ。

しかし、それは歴史でもあった。歴史の中心には、常に彼らがいるのだ。

王族は今まで大事にされてきた。確かに自由はほとんどない生活だったが、彼らが生きる望みを失うまで、追い詰めたのは誰だ。

それは国民だ。大衆だ。空気だ。

故郷を見下ろしながら、閤硝子は思った。

この世はおかしい。

技術が進歩し、ネットワークで星の裏まで情報が届くようになり、国と国が併合し世界が一つの国になりつつある今、何か大事なことを忘れていく気がする。

古いものは淘汰され、新しいものは巡るましく代わってゆく。
民族間で起こる差別や、性差別、そこに起こる暴力も許されるものではない。

このままではいけない。変わらないといけない。
だが、どうやって？

王女だ。王女を探そう。

王女を探して、王室をもう一度見直せば、何か変わるかもしれない。
（そうだ、それに、俺の全てを賭けよう。）

「どうしたよ、急に飛び出るなよ、びっくりする」

ビルが小走りで寄ってきた。

「ごめん、ちょっと思うところがあって」

「お前の『ちよっと思うところ』ってのは、原稿用紙にすると何枚なん？」

「1枚もいかないと思うけど」

「なるほど、あまりにも文章が巧みすぎてうだうだ書かなくていいってことか」

「俺は志賀直哉か。それか漢詩か」

ビルの嫌味をさらっと受け流す。恐らくはビルはいきなり飛び出していったことに腹を立てているのだ。彼は自分よりも優位な立場になりたいと常々思っているので、自分が彼を無視したことは許せないのだ。

「とにかく、それはどうでもいいだろ」

闇硝子は呆れて、地面をけた。小石がコロコロと緩やかな坂を転がっていく。

それがだんだんとスピードをつけて落ちるように転がっていくのを見て、自分の心もどこか焦りを覚えていた。

ふと、先刻の悪夢を思い出す。

殆ど内容は忘れてしまったのだが、うっすらと覚えている。

確か、夢の中で、俺は誰かを説得していた。そして、誰かが絶望していた。

無理やり思い出そうとしたら、うっ、と吐き気が込みあがった。

昔からあった持病のようなものだった。深く自分を見つめすぎると、体が拒否反応を起こす。まるで、他人から移植された臓器によって、口内炎ができるみたいに。

そういった自分の口内炎を他人に見られなくなかった。特に、ビルには。あいつは得意げな顔をして自分を嘲り笑う隙を窺っている。

気持ちを整えるように、深呼吸をして、ビルに言った。

「俺、ここを出ていくよ」

これにはビルもあんぐり口を開けて何を言っているかわからない状態だった。

「俺は、ここを出て行って、そして、自分の目指す国を作る。まずは王女を探すよ。だから、ここを出ていく」

「出て行くってつったって、お前……その格好で行けんのか？ 軍もまだとどまってるって聞いてんし、なによりお前のその出で立ちが目立ち過ぎる。紅でもひきや、女になれるぜ」

「心配してるのか、からかってるのか、どっちかにしてくれ」

「半分半分、だな」

やはりこいつは……と、とっちめたい気もしたが、身長差と己の忍耐力を考え、ここは引き下がった。「俺のことは気にしないでくれ。俺の好きに出て行くんだ。死にはしないよ、絶対に」

「目が覚めたら牢獄って可能性はアリやな」

この男の口はどうやら相手を逆なでする言葉を選ぶ能力にたけているらしい。

「ちょっと待ってろ」

そういつてビルが家の中に入ると、すぐ戻ってきた。
手には、黒い何かが携えられている。

「俺のコートや。流行が終わってもう着ないから、お前の好きなように着れば。丁度お前の髪色もある程度誤魔化せるし、それに、寒さも凌げる。まあ、これから暖かくなっていくけどな。唯一の問題は身長や。お前じゃコレ、マキシコートになるやろ」

「余計なひと言だ」

わざわざ突っ込みを入れてあげる自分にちょっと感動した。

「そうだな、お前の好きなように生きたらいい」

ビルが突然に言った。

「お前はストイックな奴だったからな。今まで何一つ欲しがらなかった。そんなお前が今ではこうや。泣けるぜ」

やれやれと肩をすくめるビルは、まさかの国を所望しますかと笑っていた。

闇硝子も、ちょっとだけ笑った。

そして、闇硝子は身支度を済ませると、彼に挨拶をしてから出て行った。

長い長い、激しくて辛い、戦いの始まりだった。

※

数十分後、寝ぼけ眼で、少女――ランはビルに尋ねた。

「闇硝子が、いない」

ビルは今起きてきたのか、と尋ね、そして「旅に出た」といった。
「今、丘のふもとのスーパーにいるみたいだ。追いかければ、すぐ追いつくよ。君の足さえあれば」

ランは考えるよりも早く、駆け出していた。

「おい、待てよ!!」

ビルはそれを見て、子供って、取り扱いにくいな、とため息をついた。

蛇足・更新し続ける登場人物紹介

※最新話までの情報を含む恐れがあります。

＊そのうゆめ蘭生夢 12歳 誕生日9月29日 身長153cm

主人公。

聖女子学園に通う、お嬢様。2年前以前の記憶がなく、瞳は右青、左金のオッドアイ。

内気で積極的に動こうとしない人間であるため、いつも1人ぼっち。ここではない世界軸のとある国の王女、という疑惑をかけられている。

＊やみがらす闇硝子

主人公。

身の丈にあってないマキシコートを常に着用している。整った顔であるらしく、髪、瞳ともに灰色をしている。瞳が大きく、そのせいか表情がなかなか読み取りにくい。記憶力が良いらしい。

＊ラン

闇硝子の相棒。黒いTシャツに黒いレギンス、そしてその上から一枚の布を被ったような風貌の少女。

髪、瞳ともに黒色をしている。

どこか間延びした喋り方をするが、闇硝子に対しては敬語。

1. 少女、蘭生夢について

東京のはずれにあるひっそりとした田舎町、若宮。

人口1万を切り、今では越しに来る人はほとんどいない。

人口の減りを抑えるために数年前に建てられた駅前高層アパートも、今は誰も住んでいない。というか元からアパートに住む人なんて無いに等しかった。農業従事者はお年寄りが大半だし、そしてそんな田舎町に住みたいと思う酔狂な若者は聞いたこともなかった。しかし。

若宮の端の丘に、とある豪邸がある。去年の秋ごろに引っ越したのだ。今は4月。もう半年が経つ。

迎賓館と見紛うほどの大きさと、小さな城と言ったほうがしっくりくる屋敷だ。

田んぼ風景が広がる若宮には、どう考えても違和感があり過ぎて、逆にこれもありなのかな、と納得しそうな勢いと迫力がある。まるで屋敷が人類の感性への挑戦をしているような、そんな錯覚すら生まれる。

そこには、今日日本でホテル業を拡大させている蘭生^{そのう}という老夫婦が住んでいる。

そして、老夫婦には娘がいた。年頃の少女——名前を夢、と言った。

「お嬢様、朝ですよ。いい天気です」

女中の張り切った声が、ベッドの上の少女の鼓膜を揺さぶる。

窓から温かな朝日が差し込んでくる。

それから、少女はゆっくりと体を起こすと、眠気眼でおはようと言った。

少女は、蘭生夢は眠気眼をこすると、ベッドから降り、身支度を始める。

顔を洗い、髪を整え、制服に着替える。

今日は、学校だった。

蘭生夢は、お金持ちのお嬢さんが通う、所謂『わざわざ学校』というところに通っていた。

今年の春から中学1年生になり、聖女子学園中等部の一生徒になる。

蘭生夢は教室に着くと、机に座って授業の用意をする。

その間、クラスメイトとの会話は一切ない。あいさつもろくにかわさない。

蘭生夢が意図的にそうしているのではなく、クラスの雰囲気があるうさせていた。

机に数学のノートを出す。教科書を出す。パタ、と静かな空気の振動音がやけに耳に付いた。

姿勢を伸ばし、黒板を見つめる。丁寧に掃除された黒板はきれいだった。

落ち着いてからカバンからブックカバーのついた小説を取り出す。まだ読みかけだった。

「あら、いたの。おはよう蘭生夢さん」

声をかけてきたのはクラスメイトの中心人物、しおりだった。

しおりは黒髪長髪の、大和美人で快活な人だった。

「おはよう……」

小さな声で目をそらしながら返すと、しおりは不満だったのか、顔をしかめた。

「蘭生さん、お願いがあるのだけれどいいかしら」

「なに？」

「今日、私昼休みに係で会議に出なくちゃいけないのだけれど、私

まだ課題が終わってないの」

「……それで？」

夢は本ををぱたりと閉じると、しおりの顔を見た。黒い瞳が自信ありげに輝いている。

「ああもう。どんくさい子ね。あなたにどちらかしてほしいに決まってるじゃない。会議に出るか、私の課題をやるか。ねえ、やってくれるんでしょう？」

しおりは顔を近づけ、夢を睨んだ。

夢は心底呆れ、しかし負けじと言い返す。

「課題をやらなかったのはあなたの責任、会議に出るのもあなたの責任よ。会議に出るくらいならしてあげてもいいけれど、そんな頼み方では納得できないわ」

「なんですって!？」

すぐにしおりが怒鳴った。顔の表情は大きく崩さなかったのは金持ちの娘らしいが、その仮面の裏側には憤怒の炎が燃えたぎっているのは容易に分かった。

しおりが怒鳴ったことで、周りの関係のない女子がやってきた。どれも、しおりのとりまきだった。興味本位というか、しおりを心配するようなもしくは夢を軽蔑するような目だ。たくさんのかこまれる。

「ねえどうしたの」「なにがあったの」

その時夢は思った。

(私は何も悪くはない。)

なのに、この目はなんだ。夢を咎む目は。四方八方網目のように夢を取り囲んでいる。

「不快だわ!」

勢いよく立ちあがると、廊下へ飛び出した。

廊下に出ると、周りの女子が驚いて夢を見ていた。

夢はいたたまれなくなつて、がむしゃらに走りだした。

※

「また、喧嘩したの？」

お昼休み。蘭生夢は、友人の二ノ宮真理と昼食をとっていた。

「喧嘩、じゃないよ。……一方的に私が怒って飛び出したの……」

「うーん、災難だったねえ。クラスメイトから非難浴びせられるって。悪いのはしおりっていう馬鹿女じゃん。夢に仕事押し付けようとしたんでしょ。サイテー」

真理はお弁当のおかずをパクパクと口に運びながら、怒ったような顔で抗議した。

そのたびに、真理のポニーテールが揺れるので、本当に尻尾みたいだと思った。

二ノ宮真理は、蘭生夢の唯一と言っている友達だった。

クラスメイトとなじめない蘭生夢は、二ノ宮真理と出会い、そして親友になった。

二ノ宮真理は明るく、自由奔放に生きるお嬢様らしくない女子だった。

政治家の娘なので、彼女は彼女なりの悩みがあるのだが、それを決して見せようとしないう。そこが蘭生夢が彼女に惚れていたところだった。

それに、彼女は周りから疎ましく思われる存在の夢を、ずっと応援してくれている。真理はクラスも違って彼女は彼女だけの友達がたくさんいるはずだが、蘭生夢だけを選んでくれていた。だが、夢は自分と真理の関係が周りに露見することが怖くて、真理とご飯を食べるときはいつも体育館裏を選んでいた。

「全くさ、なんでこんない子が相手にされないんだろうね。私悔しいよ」

「いいや、問題は私にあるかもしれないし……うまく馴染めるまでに時間はかかるって女医さん言ってたから」

「あらら、本当に保健室通いが身に付いちちゃってんのね、夢」

蘭生夢はクラスに馴染めないからと頻繁に医務室へ足を運んでいた。それはよくないことだともちろん分かっていたが、学校で甘えられるのは、女医と真理しかいなかった。助言がほしくて、女医のもとへ駆けつけた。

夢は、後先が不安になってきた。このままでいいのだろうか。まだ馴染めるのに時間がかかるのだろうか……。

物憂げな顔をした夢を、真理が見た。

「まあ、金髪の外人な女の子っていう点でかなり目立っちゃってるよねー。ほら、この学校ミッシヨン系だし？ 生粋のキリスト教徒って感じで」

蘭生夢は金髪だった。染めているわけでもない彼女の髪はやたらと目立つ。

だが、それがいじめられていい原因となるはずはない。

「あ、そうそう」

真理が思い出したように話題を変えてきた。くるくると、箸の先で弧を描く。

「この前、本屋さんに行ったんだ。小説買いに。ほら丁度、若宮の駅の商店街で」

「ホントッ!? 私の家の近く!? 寄ってくれたらよかったのに」
若宮は夢の故郷だった。といっても半年くらいしか住んでないが、とにかく寂れている若宮に、遠くの客が来ることは珍しかった。来るとしても長旅の休憩ポイントが妥当だった。

それは真理も然り。

「違うのよ。車で遠くに行ったのだけど、その途中母親が食べ物を

買おうとして、商店街に寄っただけ」

「あ、そうなの」

夢は残念に思うが、妙に納得できた。

「ていうか政治家一家でも商店街に寄ったりするんだ」

「まあね。私の家は地域密着が主義だから。コンビニとかよく行く」
話がそれちゃったね、と真理は言う。

どうやらここからが話の本筋らしく、真理は肩に力を入れた。

「でね、その本屋さんでね、見かけたの」

真理が楽しそうに興奮した様子で夢を見つめる。

「見かけたって……何を？」

少しその勢いに蹴落とされながら、夢は何だろうと想像した。

珍しい小説でも見つけたのだろうか。あの本屋さんは流行を追わない代わり、店主のお勧めの本を入荷する。それはプレミアがつく過去のちょっとした名作だったり、廃版したものなども稀にある。

だが、真理はそんなものを見つけたのではなかった。

「見かけたの！　かっこいい男の人！！」

思わずため息を漏らした。そうだった、真理はアイドルの追っかけだったことを思い出した。

真理はかっこいい人には目がない。ジャニーズ関係のアイドルのファンクラブには片っ端から入っているし、学校に写真集を持ってきたりして、それをクラスの人に広める”宣教活動”もしていた。

ドラマ映画舞台はもちろん、果てはCMで格好がいい男の人を見かけると、すぐに録画を開始した。

まあ病的なくらいにそんな習性をもっていた。

「真理がそんな風にいうくらいなら、どれくらい格好がいい人だったんだろうね」

「うーん、今思うとそんなにかっこいいわけじゃなかったかも」

「え、どういうこと？」

「あれはかっこいいっていうより、神秘的って言ったほうがいいん

じゃないかな」

友人の咄嗟の一言に、思わず吹き出してしまふ。

神秘的などと、よく恥じらいもせず言えるものだ。

「すごい顔が整っててね、物憂げな顔をしてるの。指先とかめっちゃくちや綺麗でね、本を丁寧に繰る様はなんかもう芸術みたいっていうか。おとぎの国の王子様っていうか！」

べらべらと捲し立てる真理を見て、上から目線に楽しそうだなあ、と苦笑いした。

ところが、夢はそんな男など若宮では見かけたことがなかった。なにしろ若者すら見かけることが稀なのであるから、そもそもその男は若宮には住んでないことが分かる。

「夢、お願い！ その男の人についてリサーチしてきて！！」

パンと手をたたく小気味いい音が響き、突然の友人がお願いしてきた。夢を拝み、頭を垂れつつ、懇願するような形で。

「ええっ？ 私そんな急に言われても、恥ずかしいし嫌だよ……」

夢は一刻も早く家に帰りたいのだった。

それを知ってか知らずか、真理は

「今度、映画に連れて行ってあげるから！！」

ともので釣ってきた。夢はうつ、と痛いところを突かれ、仕方ないね、と最後には折れてしまった。

ともあれ、今日の学校の帰りに、商店街の本屋へ寄ることにした。

※

蘭生夢は部活をしていない。おかげで5時前には学校から帰ることができる。

部活動にさして憧れはなかった。興味があるのはあるけれど、ど

れも夢にとっては次元の違うものに見えたからだ。運動はできないし、音楽も自信がない。美術もセンスがないと思うので、全てみんな、諦めた。まあ、学校から家が遠いという理由もあるのだが。

学校が終わると、いつもの場所にお迎えの車が来る。黒塗りの、いかにも、といった高級車だった。

「いつもありがとうございます」

車に乗り込み、運転手にそう言うと、満足そうに笑みを浮かべながら「それでは発車します」と運転手は返すのだった。

「寄ってほしいところがあるの」

夢はおもむろに告げる。運転手は何かを悟ったように「20分だけですよ」とまずそう言った。

牽制を取られた気がしたが、まあいいや、とふっと窓の景色を見た。

※

本屋に行くのはこれで3回目だっただろうか。いや、もっと多かっただろうか。

お店には木彫りの古めかしい看板がかけてあり、大きく「岩熊書店」と彫られていた。一体何世代前からあるのだろうか。歴史を感じた。

暗い店内にいそいそと入ると、まずは埃っぽい臭いがした。それからインクの匂い。店の奥にはふすまがあり、微妙な隙間が開いていた。そこはどうかやら店主の生活スペースらしい。古めかしいテレビが見えた。

ふっと、視界を横に滑らせると、そこには男がいた。

寒さが残っているとはいえども、もう春だ。それなのに男はくるぶしまである黒い外套コートを着て、店内の本を読みふけていた。

変な客だと思って注目していると、彼はこちらに気づく様子もなく、とにかく読み進めた。

彼の本を読むスピードは驚異的だった。まるで適当に本を繰っていると思うくらいに、早くページが進む。その本は古めかしく、分厚かった。おそらく字も小さいはずだ。そんな本を平気で読んでいく。その異様さによりますます彼の存在が自分の中で確立していった。

不意に、彼がこっちを見た。自分がずっと彼を見ていたから視線に気がついたのだろう。

「なに？」

2つの瞳が夢を捕らえる。

夢は、驚いた。そして、ああ、確かに真理が例えた通りだったと漠然と思った。

そこには、不思議なくらい綺麗な顔をした1人の少年が立っていたのであった。

2. 少女、蘭生夢について

真理の言った通りだった。彼は、確かに綺麗だった。

何よりも瞳が、綺麗だった。髪の毛と同じ灰色で、瞳が白目より大きい小鹿のような目をしていた。

その2つの眼が、夢を捕らえている。

「なに？」

男は――恐らく身丈からして少年、は本を開いたまま、顔だけをこちらに向けてくる。

夢は一瞬驚いて動けなくなるが、だが、何知らぬ顔で、その少年の横を通り過ぎた。

別にリサーチだからといって会話しないといけないわけではないのだ。

蘭生夢は気持ちを落ち着かせて近くに積んであった適当な本を拾ってパラパラと読み始めた。

古びた本屋が、奇妙な空間に転換される。せまい本屋に2人きりで立ち読みというのは、なかなか辛い。

適当に拾った本なので、内容がさっぱり頭に入ってこなかった。

というか、少し大人向けの実用本で、夢にはまったく意味のないものだった。

隣で本を勢いよく読み進めているはずの少年に耳を傾ける。

しかし、全くページを繰る音がなかった。ページを繰る際、まったくの無音である、という人物は少ないだろう。

不思議に思っ、右隣の彼を見ると、彼が、こちらをじいっと観察していた。

また目が合う。それはホラーだった。

「あの、なんですか……？」

驚きつつ、相手を刺激しないよう丁寧な物言いで尋ねた。

すると少年はこちらに歩いてきて、いきなり夢の顔をくまなく調べ始め、なにに満足しているのかうんうん、とうなずいた。

夢が目を皿にして驚いていると、彼は

「もしかして、くせ毛だったりする？」

と強引に聞いてきた。

硬直して訳がわからない夢はおもむろに、無言でうなずく。

「じゃあ、昔は長髪だった？」

それもうなずいた。

「ルビーのようなペンダント持ってる？」

あまり考えずにうなずいたが、そんなものがあつた気がする。

次に彼は言葉を選んでいるのか、一瞬間をおいてから口を開いた。

「それと、記憶喪失だったりしない？」

夢は驚いた。

「あと、両眼の色がそれぞれ違う、オッドアイかな？ できれば右

が青で左が黄だといいたけど」

まるでカフェでウェイトレスに注文を頼むような言い方で、最初、言葉の意味が分からなかった。

少年は今までとりあえず当り触りのない質問を続けてきた。恐らく全て Yes に当てはまる人間は少なくないはずだ。蘭生夢はその中の 1 人だったはずなのに。

だが、これは、あまりにも適当すぎる質問だった。

夢は気持ち悪くなって、本を元あつた位置に投げ捨てるように置き、その場から逃げた。

荷物をしっかり握って、肩を縮こめて、大股で歩きだす。

まだ、約束の 20 分にはなっていない。不安を隠しきれない顔で、彼のそばを通り過ぎる。

腕を、捕まれた。

「つきゃ！」

静かに悲鳴を上げた。振り返ると、やはり彼がいた。鼓動が激しくなる。また、彼の瞳からそらせなくなる。

ふいに、彼が微笑んだ。

その場に溶け出していきそうな、優しい笑みだった。安心していいよ、という意味なのだろうか。それとも罠か。

もう、わけがわからない。

「お嬢さん、あなたはここじゃない世界の、とある国の、王女だ」とうとう来たか、と諦めたように夢はため息をついた。

ああ、これが、変質者だ。春だから、変な人が出る。頭にお花畑の、勝手に幸せな人たち、この少年はその中の1人だ。――そう心の中で決めつけた。決めつけることによって、とある不安が軽減する。

だから、言い返してやった。

「そんな風に短く言葉を切らなくても分かるわ。あなたが大概頭のやられちゃった人だってことくらい」

そう言って、手を振りほどこうとすると、ずっと彼の腕が撫でるように離れた。

その時に初めて彼の指がまた長くて綺麗だと分かった。

少し気になるが、振り返らずに、本屋を後にした。

とある不安、が、まだ夢を蝕んでいる。

※

その日は、二ノ宮真理も、女医もいなかった。学校を休んでいた。一人で体育館裏で食べるお弁当では、お腹は満たされなかった。それどころか、思いのほか風が寒くて病気になるそうだった。

まだ食べ終わってない弁当箱を片づけて、膝を抱くように縮こま

り、風の音を聞いた。

午後の授業は出たくないなあ、とそんな斜めった考えを持て余した。

今日もクラスメイトから仕打ちを受けた。無視されたり、自分のノートを隠されたりした。

それは、さっきの授業のことだった。

「それでは蘭生さん、この問題を前で解いてください」

そうやって数学教師は蘭生夢を指したが、夢は何度探しても数学のノートが見つからなかった。机の引き出しを何度も出し入れし、焦っていた。その問題は教科書を見れば解けるレベルだったので、そのまま板書していったが、後ろに座って待っているクラスメイト達の視線が怖かった。

ノートを隠したのはどう考えてもクラスの中の誰かだろう。その誰かが、蘭生夢を困らせるために隠した。今みたいに指された時に慌てふためくのを楽しむために。

蘭生夢は怒りに燃えた。ただし、静かに。

反逆してやろうと、いつもより本気を出して、問題に取り掛かった。

そして、解く速さ、正確さ、字の綺麗さ、見やすさ、どれも完璧に仕上げた。

教師も少し驚いて、蘭生夢を見た。クラスメイトも驚いて顔を見合わせていた。

その中のしおりは睨むように夢を見ていた。恐らくこいつが犯人だった。

夢が優越感に浸りながら、席に座った。

その時のしおりの顔はどんなに醜く歪んでいただろう。自分より後ろの席なので、見れなかったことが残念だった。

だが、問題はその後起こった。

次に指名されたのはしおりだった。しおりは急にうつむき、静かに泣きだした。認めたくないが、綺麗な泣き顔だった。

しおりの取り巻きはすぐに彼女を介抱し、状況を把握し、教師にこう告げた。

「しおりさんの数学のノートがありません」

夢は驚いて思わずしおりの席を二度見した。胴を思い切り捻り、目を睜っていた。

まさか。そんなはずがあるわけない。盗まれたのはこっちなのに。別の犯人がいるってことなんだろうか。そんなの考えられない。しおりのノートを盗もうなんてやつは、恐らくこの学校のどこにもいない。

思考がごちゃごちゃになり、脳が熱くなる。

そんなを冷ましてくれたのは皆の目線だった。

気づくと、夢は、しおりの取り巻きに睨まれていた。

自分の足が震えているのが分かった。ついでに言えば、目の焦点が合わなくなった。

「蘭生さん、ちょっと机の中を見せてもらってもいいかしら？ 先生、貴重な授業時間をこんなことに使ってしまったてすみません。でも、大事なことです」

すらっとした気持ちのいい声で喋ってくれたのは、バレー部のアカネだった。アカネは迫力のある長身で、男の子のようなベリーシヨートの似合うスポーツウーマンだった。確か都の選抜メンバーに選ばれていた気がする。教師は、まあいいけれど、という風に困った顔をしていた。しおりはクラスの中心人物だ。そんな子を、生徒であろうとも簡単に敵にしているならないというのかもしれない。

「蘭生夢さん、いいかしら」

アカネがまた声をかけた。

それは有無を言わせない尋問だった。

夢はしずしずと机を彼女の方に向けた。盗まれたのは私のほうであり、もちろん私も彼女のノートを盗むなんてことはしないし考えにも至らない。自分の身の潔白を証明するために、観念したのだ。アカネはしゃがみこんで、引き出しの教科書、ノートを調べていった。

蘭生夢はなんで、私だけがこうも目の敵にされるのだろうかとほとほと悩んでいた。

「あった」

あまりにも彼女の声が静かなもので、最初、何を言っているか完全に理解できなかった。

ただ、その彼女が手にしているノートには、しおり、とペンで書かれてあったことだけは分かった。

はて、と夢は思った。が、その次の瞬間、激しい驚きが襲ってきた。

「な、なんで？」

思わず声に出して叫んだ。まさか、あるはずがないのだ。あの時あれだけ引き出しの中をチェックしていたのだ。自分ではないノートがあると、すぐに気がつくはずだ。

あ、と思わず間抜けな声が出た。彼女のノートは、夢の使っている国語のノートと同じ色をしていた。ああそうか、あの時焦っていたから、微妙な違いにも気付かなかったんだな、と諦めの気持ちが心に蔓延していた。

そうだ。そして、クラス全体から注がれる、非難の目が一斉に夢の周りに集った。

皆険しい表情をしている。

夢は必死で、優しい顔をしているクラスメイトを探した。ただ、何回も首を捻っても、180度眺めても、誰もそんな人はいなかった。

その時初めて、自分が孤独であると分かった。

ぱんぱん、と小気味よい音が響いた。それは教師の手を叩いた合図だった。

「はい、授業に戻りましょう。ノートが見つかってよかったですね、しおりさん」

何食わぬ顔で、笑みを浮かべる。

クラスメイトは何も言わずに席に付いた。ただ、蘭生夢だけが、席に座れないでいた。

茫然と、向きの変わった机を眺めていただけだった。

休み時間になり蘭生夢はすぐに教室を出ようとした。

すると、腕を掴まれ、振り返ると、案の定そこにはしおりがいた。たくさんの取り巻きに囲まれ、女王のような貫禄を見せるしおりは、和やかに頬笑み、

「もう二度と私のノートなんて盗らないでね」

そういつて、去っていった。

何か様子がおかしいと思っていると、今度は背後——廊下側から、「蘭生さん、ちょっとこっちに来なさい」という声がした。

先ほどの数学教師だった。しおりはこの教師の目の前でいけしゃあしゃあと、蘭生夢をその広い心で罪を許したように演じたのだ。

ああ、と蘭生夢は思った。

私は、もうどうしようもないところまで来ているのかもしれないと、嘆いて——諦めた。

そして、今に至る。

昼休みが始まり、逃げるようにいつもの体育館裏に逃げてきたのだった。

もう、このままサボタージュしたい気分だった。

ノートのことも、盗まれたことも、全部記憶から消し去って、リセットしたい気分だった。

蘭生夢は今までクラスメイトの数々の仕打ちによく耐えれたな、と感慨深く思った。

ぼーっと空を見上げていたら、気付かなかった。

蘭生夢の眼前には、やや大きなカラスがそこに佇んでいた。

3. 蘭生夢の告白

カラスはただそこにいるだけだった。

餌を探したり、飛び立ったりする様子もなく、じっと夢を見ていた。

その不気味さに夢は一瞬たじろぐが、そのカラスが攻撃しないと分かったと、落ち着いてカラスと向き合った。その瞳には不思議な心強さがあった。

女子中学生とカラスが向き合うというのは変な話ではあるが、話し相手もすることも無い夢にとって、それは運命のようにも感じた。「あのさ」

蘭生夢が声をかけた。カラスはじっとしたまま動かない。

「私、蘭生夢っていうの。そのう、ゆめ」

誰でもよかった。自分の話を聞いてくれるのなら、男でも女でも人間でも動物でも、果ては植物でもよかった。つまりは、夢はそれほど追い込まれていたのだ。

「この前、商店街の本屋ですごく不思議な男の子を見かけたの」
いじめられている話は極力したくなかった。悲しすぎて立ち直れない。

ふと思いついたのは、どうしてか、彼の話だった。

だが、とりとめの無い話なので、まあいいかと自分を納得させた。それに、あの不安も緩和されそうな気がしたからだ。

「何が不思議かっていうと、もう五月なのにコートを着て、そして今まで見たことのないくらい綺麗な人だったの」

いまま思っ出すだけでも素敵だった。瞳の大きい優しそうな目が印象的で、それしか見てない気がする。

「でもね、それ以上に驚いたのは、初対面なのに、私のことを知ってるってこと」

蘭生夢は、左目に指を当てた。どうやらコンタクトをしているら

しく、それを少しためらった様子でゆっくり取り外した。

蘭生夢がカラスを見据える。

その瞳は、先ほどとは違っていた。

目つきの話ではない。視力の話でもない。

右の瞳が青色であるのに対し、左は金色であった。

幾らかの沈黙の後、そして、少女はまた喋り始める。

「あとそれとね、私、記憶喪失なの」

少女が悲しげにうつむいた。

「二年前以前の記憶がなくてね、自分の名前も、どういった暮らしをしていたのかさえ、思い出せないの。でもね、記憶喪失って言うたって、ある程度の生活を営めるくらいの知識はあったの。不思議でしょ。まるで自分から記憶をなくしたみたいに都合がいいんだもの」

少女は目を伏せた。

なぜ、あの少年はその身の上を知っていたのだろう——それが蘭生夢を蝕んでいた不安だった。

記憶を失う前の、知り合いなのだろうか。それにしてもなぜ、若宮という田舎にいるのだろうか。

彼が以前の知り合いだとしたら、ではあの言葉は何だったのだろうか。

『あなたはここじゃない世界の、とある国の、王女だ』

ジョークとも思えない。少なくともその時の彼は真面目な顔をしていた。

その言葉の意味は？ 何かの比喻なのかそれとも……。

考えるのはよそう。蘭生夢は諦めた。

それから、弁当箱のふたを開け、カラスに差し出した。

「話を聞いてくれるお礼。食べかけだったけど、もしよかったら」カラスは最初はためらっていた様子だったが、次第にくちばしを弁当箱のふちにかけ、食べ始めた。

「相当お腹がすいていたんだね」
夢はそこで初めて笑みを見せた。

蘭生夢はいくら時間がたってもそこから動こうとはしなかった。カラスも同様に動きはしない。
もう少しで昼休みが終わってしまう。

「教室には行きたくないなあ……」
突発的にそう呟いてしまった。
カラスがこちらをじっと見ている。
まるで、どうしたのといったげなように。

蘭生夢は何でもない、と言いかけたが、このカラスなら言っても大丈夫だろうと思い、口を開けた。
「私ね、いじめられてるの」

それからカラスになんて説明したか覚えてない。
それは頭を無にしようとしていたからだ。泣いてしまわないように。

でも、誤解されないように丁寧に話した気がする。

その日の午後の授業は、保健室で休んだ。

※

蘭生夢は部活には入っていない。
勉強がしたかったのと、人間関係に揉まれそうだったのでためらわずに入らなかった。

だから、夕暮れ前には帰ることができた。

これであの忌々しい学校から一時的におさらばできる。そう思うのが日課であった。

登下校はいつも、運転手付きのベンツだ。名字しか分からない男、日によって女だったりするが、夢はその人から学校のことを何か聞かれるのが嫌だった。

なぜなら親やお手伝いさんには、片っ端から学校での私は上手くいっていると思っっているからだった。

そろいもそろってみんな単純だとほとほと呆れたが、蘭生夢が上手くいかないほうがおかしいかも知れない。

蘭生夢は記憶喪失ではあるが、同時に勉強に関しては誰にも負けなかった。

不動の学年1位。そう呼ばれ始めたのは最近だった。

ペーパーテストがあるたびに、蘭生夢は他の追隨を許さないほど圧倒的な点数を見せつけた。

蘭生夢が勉強が好きという点もあったが、もともと才能があったのも否めない。

そして彼女は、元・孤児だった。

今の蘭生老夫婦は児童養護施設——俗に言う孤児院で知り合った。確か、二年前の春だった。

記憶喪失、かつ戸籍のない外人少女として当時は小さいながらも反響を呼んだ。

イギリスからなど海外からの連絡がないと分かると、少女は児童養護施設で数カ月過ごすことになる。

そこで、蘭生という老夫婦が少女と養子縁組を結び、少女は、蘭生夢となった。

孤児で、学年不動の1位を確立している夢の存在は、学校を大きく揺るがせるものとなった。

奇異の目で見える者、尊敬の眼差しを向けるもの、嫉妬を燃やす者、しおりは其中最も嫉妬の念を抱いていた。

だが、それはいじめていい理由になってない。蘭生夢は心の中で叫び続けた。

※

蘭生夢は黙々と学校の門をくぐり、外階段を降りた。

ベンツでのお迎えは学校専門の駐車場で待っている。階段を下りて、右だ。だっ広い駐車場に、運転手がじっと座って待っている。

蘭生夢は読みかけの小説を取り出した。

今日は家にも帰りたくない気持ちだった。学校での出来事が、義親に知られていたら、どうしようかと思った。だから、階段の一番下の段に座り込み、小説を読んだ。

運転手に連絡を入れた。

『文化祭の用意があるので、放課後残ります。恐らく6時には終わります。また連絡をします。』

電話ではなくメールにしたのは、嘘が簡単につけるからだだった。

これで、2時間は解放される。

ほっとした矢先、小説のページに影ができた。目の前に誰かが立っている。蘭生夢は運転手だったらどうしようかと思った。

だが、それ以上に驚いた。

彼だった。

「やあ、そんなところで本を読むなんて、よっぽど本が好きなんだね」

くるぶしまであるマキシコートに灰色の髪、灰色の眼。

彼は微笑んでいた。

「どうしてここに……!? 部外者は入れないはずよ!」

校門を抜けたとはいえ、まだ敷地内であるはずの場所に、彼がいることはおかしかった。

「まあまあ、落ち着いてよ。あ、それ何ていう小説?」

やけに馴れ馴れしい彼は蘭生夢の持っていた小説を取り上げると、しおりをはさみ、最初から読み始めた。

「5分待つ」

手のひらを広げ、5、と示し、蘭生夢の反撃を制止させる。蘭生夢はしずしずと座り込んだ。

静寂な時間が過ぎた。その間、ここを通る人はいない。文化祭の手伝いで帰宅部は残っているからだ。つまり、夢はその手伝いをサボタージュした。

彼は異様な速さで本を読んでいく。恐らく1ページ1秒もかかっていない。

邪魔をしてやろうとも思ったが、見ず知らずの変な男を怒らせるのは大胆な冒険だったので、止めた。

彼は五分もたたないうちに、夢に本を返した。

「言っとくけど、ネタバレは厳禁よ」

「分かってるよ。っていうかネタバレしても支障はない小説だと思うけど。随分前衛的な物語だね。安部公房って砂の女とか書いた人だね」

「好きなの、その作家さん」

もうそのことに関しては干渉しないでといたげに蘭生夢はぶすくれた。

「ごめんごめん」

笑いながら謝る彼に、夢は苛立ちを覚えた。

「というより、どうしてこんなところにいるんですか。この学校は

完全女子校だから男子禁制なんです。出ていかないと警察に呼ばれますよ」

「ふうん。随分と閉鎖的なんだねえ」

脅しにも引つかからない。（警察呼ばれるのは本当だけれど）

彼は一体何者だろうか。

「あなた、何てお名前なんですか」

気がつくと言っていた。ほとんど無意識だった。

彼は一瞬戸惑っていた。

「ヤミガラス」

そう、彼は言った。

「えと、もう一度」

「ヤミガラス。そう呼んでくれ」

「……はあ」

恐らく日本では聞いたことのない名字だった。というより日本語だということすら怪しい。

「失礼ですが、スペルを教えてください」

「闇夜の闇に、窓硝子の硝子。がらす闇硝子っていうのさ」

彼は、なんと日本名だった。

「それ、何かのハンドルネーム？」

胡散臭い名前には疑わずにはいられない。どこか痛々しい気がした。一昔のヤンキーが好んで使った『夜露死苦』のようで、馬鹿馬鹿しい気もした。

「ハンドルネームではない。けど、本名でもないのは確かだね。でも俺を知ってる人は大抵、闇硝子っていう。だから、闇硝子でとりあえず落ち着いてくれないかな」

どこをどう落ち着けというのだろう。そもそも彼がこの校内にいる限り、安息は得られないのだが。

「でも、お嬢さんにも2つ名前があるじゃないか」

「2つ？」

そんな覚えはない。

「蘭生夢と、エリアⅡエルディア。お嬢さんの本名は、エリアって言うんだ」

闇硝子は当たり前のことにように告げた。

「じゃあ、本題に入ろう」

蘭生夢は完全に置いてけぼりだった。闇硝子はそれでも構わないらしい。話を続ける。

「今日はお嬢さんを助けに来たんだ」

「頼んだ覚えはないわ」

「じゃあ、借りを返しに来た」

作った覚えはない。闇硝子はどうやら蘭生夢の知らないところで勝手に話をつなげているようだった。

「お嬢さんは、いじめられているんだらう？」

冷たい水を頭からかけられたような感じがした。心の奥底にとどめてきたことが、すぐに露呈されてしまった。

今日の出来事が、めぐるましく思いださせる。

しおりと取り巻きが遠くからこちらを睨んでいるような気がした。数学のノート。私の、数学のノート。ない。どこにも、ない。

『もう二度としないでね』『蘭生さん、ちょっといいかしら』『あった』

私じゃない。私じゃないの、ねえ皆、分かってよ、知ってるんでしょ。本当は皆、知ってて私を悪者に仕立て上げようとしてるんでしょう？

「そんなに驚かないでよ。こっちがびっくりする」

なんで、この男は、自分のことをよく知っているのだろう。

それは恐ろしく思えてきた。

「……帰って」

「どこに？」

「いいから帰ってよ！！ 顔も見たくない！！」

蘭生夢は突発的に彼の頬を叩いた。

パチン、と小さく音が響いた。手のひらに、小さく痛みが広がった。

いけないことをした、とはすぐには思えなかった。

まだ網膜にしおり達の影が焼き付いてはなれない。それを払うこともできない。

とにかく怖かった。次は、彼女たちに何をされるのだろうかと思うと、足がすくんだ。

蘭生夢は、いつも怯えていたのだった。

「なんで、泣いてるの……？」

静寂を破ったのは、闇硝子による言葉だった。

その時、自分自身が泣いてるのが分かった。荒い息が上がる。

「分かんないよ、何も分からないから泣いてるの……」

鼻先がツン、と痛みを覚えた。鼻水が垂れてくる。

訳が分からなかった。何をしているのかもわからなかった。

「だから、言っただろう。助けに来たと」

闇硝子はそう言った。

「泣き止むまで待つからさ、ほら」

蘭生夢の隣に、闇硝子が座り、泣きだした夢をそっと支えてやった。

彼の指先は、とてつもなく冷たく感じた。それは心地が良い気もした。

3. 蘭生夢の告白（後書き）

次回から蘭生夢サイドから、闇硝子サイドへ移ります。

4. 間硝子の臓腑（前書き）

高校が忙しくて、これまで以上に不定期になります。
すみません、
頑張ります。

4. 闇硝子の臍腑

そつと校舎内に入った闇硝子は、蘭生夢のクラス、1年5組を指した。

文化祭準備のせいか、ほとんどの生徒は体育館、及び特別教室棟に移動しているらしく、がらんだった。

なので、こそこそと隠れることをせずに、教室棟の廊下を歩ける。白を基調とした廊下はとても長く、綺麗であった。

特に目立つ特徴はないにしろ、掃除が丁寧なのか、汚れているところはない。

右手には底の高い靴を持ち、土が落ちないように、底を天井に向けて歩いて行った。

5組の教室へ来た。もちろん、誰もいない。間髪なく教室へはいると、並べた机が縦横揃っていて、これはもしかしたら床から生えてるんじゃないかと馬鹿な妄想をさせるほど整頓されていた。

蘭生夢の机の位置は分かっていた。右から2列目、前から4番目だ。

机の中をのぞいてみると、ノート3冊教科書2冊が入っていた。

闇硝子はその席に座って、黄昏の教室を見渡す。天井まで届く大きな窓には、夕方の空と雲を引いた飛行機が飛んでいた。

あの飛行機には誰が、一体どういう経緯で乗っているのだろうか。そんなつまらないことを考えるくらいには暇だった。

だが闇硝子は暇というのは好きだ。何もしない時間というのが好きだった。

黒板のそばに教卓があった。しばらくすると、闇硝子はそこに近付き、一人隠れることができそうなスペースがあったので、入って隠れていた。

ガラリ、と戸が開く音がした。開けた本人は教室に入ってきてしばらく立っていた。あたりを見回しているのだろう。しかし、そこから闇硝子がいることは分らない。

こちらに近付いている様子はなかった。教室の後部の方にいる。音で分かった。

机を調べている音だ。

引き出しの中から何かを探している。いや、探しているというより物色していた。

その机は、蘭生夢のものだった。そしてその人物は、蘭生夢でもない。

恐らく蘭生夢を罠に嵌めた張本人だ。数学のノートを盗み、しおりのノートを夢の机の中にしまったのだ。

もういいか、と闇硝子は立ちあがり、その人物と対面する。

「君が、蘭生夢のノートを盗み、苛めていた本人だね」

突然の登場に、その生徒はビクツと肩を動かした。

「そうだろう？ アカネ」

突然に名前を呼ばれたアカネは肩を怒らし、闇硝子を睨むが、闇硝子は怯みもせずアカネに近付いて行った。

「来ないで、部外者！ 警察呼ぶわよ！！」

「確かに部外者だけど、警察呼ぶくらいのことはいらないから落ち着いて」

闇硝子は笑ってアカネに再び近付く。アカネが後ずさりして距離を縮めようとしない。

（危害を加えることは一切しないのに。）

闇硝子は苦笑いしてまあまあ、と相手を宥めた。

「2つ質問したいことがあるわ」

アカネは闇硝子が攻撃してこないと分かると、ある程度の落ち着きを取り戻して闇硝子を見据えた。

闇硝子はアカネがバレーの選抜選手に選ばれていたことを知っていた。だから暴力で解決することはしなかったし、アカネを逆上させるまでには追いつめるつもりもなかった。

だから、闇硝子は一定の距離を保って、彼女と対立した。

「あなたは何者？」

闇硝子はその質問に吹き出しそうになった。あまりにもストレートすぎるからだ。

「俺の名前はヴィンセント。ヴィンセント・ロッカー。デンマーク出身。趣味はレゴ。……次の質問は？」

適当な返事をした。どうせ、これ以上この女と干渉はしないだろう。その場しのぎの嘘だった。

「なぜ、こんなところにいるの？」

闇硝子はまた笑いをこらえるのに必死だった。

「ユニークな質問だね。じゃあ俺も尋ねよう。”君は一体ここで何をしてるんだい？”」

アカネがあからさまに怯んだ。闇硝子はしめた、と思った。

「忘れ物を取りに来たのよ、その、国語のノートを」

「嘘だね」

鋭い闇硝子の指摘が、アカネを震えさせる。

闇硝子は弁解した。

「その机の中には国語のノートなんてない。あるのは保健、音楽、情報だよ。教科書は保健と情報の2冊あるね……ていうか、その机、蘭生夢っていう女の子のでしょ」

アカネの反応を見るまでもなかった。

闇硝子がかったるといった風に、近くにあった机に腰をかけた。アカネはそれを見て、苦い顔をしたが、闇硝子はお構いなしだった。

「……そうね、そうよ、あの机は蘭生夢のものね。でも、別にあなたとは関係ないわ」

「蘭生夢を苛めていることに関して、かい？」

わざと相手を煽る言い方をした。

しかし、アカネは苛めているのを認めるかのように、押し黙った。
「苛めっていうのは悪いことだってぐらい分かるだろ」

当たり前の社会のルールを、小学校で習わないはずがない。

自分にされて嫌なことは、人にはしない。思いやりの心を持つ。
苛めてはいけません。

それともアカネはそれらを理解したうえで、苛めているのだろうか。もしそうだとすれば、アカネはずるくて、言い訳がましい人間だな、と闇硝子は本能的に嫌悪した。

「悪いことでも、私はしなくちゃいけないのよ」

アカネはついに開き直った。闇硝子も、彼女のアクションに関心を示す。

「命令されたのか？」

「話が早くて助かるわ」

どこまでもアカネは上から目線だった。一応、自分は年上なので、出来れば改めてもらいたい。

だが、男で不法侵入という罪を棚上げしてまで達したい目標ではなかった。

「私はね、しおりから彼女を精神的に痛めつけて、って随分と前から言われ続けたのよ」

全てを諦めたのか、アカネは壁に寄り掛かって、リラックスしている。ニヒルな笑みさえ浮かべていた。

「多分、しおりは蘭生夢が許せなかったのよ。大した努力もせずに自分より頭がよくて、自分より幸せそうで、自由もあって、お金もある。……なにより、彼女は本当の親さえ分からない孤児なのよ。」

学校側はそれを表沙汰にはしてないけど、もう皆気づいてるわ。だから、精神的に追い詰めて、目障りな存在を消そうとしたのよ」

「蘭生夢が目障り、か」

自分のことではないにしろ、少しだけ、心が痛んだ。

そう言われる辛さや遣る瀬無さを、分かっているつもりだった。無意識に、顔を下に下げた。淡い色したゴム製の床が見えた。

「君はどうなんだよ」

ふと、そう呟いていた。

「君には、蘭生夢にもしおりにもない、力がある。君は、スポーツができるじゃないか」

ほとんど、無意識に近かった。

どうして、こんなことを呟いたか、彼はこれから深く悩むことになる。

5. 心の交わり

階段で本を読みふけていた。

安部公房の箱男だ。この小説は前衛的すぎてなかなか読み進めることができない。

話を理解しようとして、何度も前のページに戻り、そして理解ができないまま、最終的には諦めてそのまま読み流す。

だが、その感覚が好きだった。だから、蘭生夢は飽きずに読み進めることができた。

「古めかしい、本だ」

女子の声がした。夢は、ゆっくりと顔を上げる。やはり、少女が立っていた。

黒い髪に黒い瞳だが、日本人離れた肌の白さが異様に目立った。猫のような凜とした瞳が吸い込まれそうなくらい、魅力的だった。「驚かせてごめん。そこらへんで、まちぼうけていたら、ここに、珍しい女の子がいて気になったんだ」

少女は驚いている様子で、身振り手振りを交えて狼狽しながら言った。

蘭生夢は最初、学校の先輩かと思った。だが、それにしては、どこか野性的な活力を思わせる外見だった。髪の毛も毛玉のようにモサツとしているし、着ている服もなんだかおかしかった。大きな布に穴をあけ、そのままそれを頭にかぶったような服だった。辛うじて帯で胴を締めているが、逆に体のラインが際立って、扇情的だった。

蘭生夢は赤面しそうになったが、どうやら下に肌着を付けているらしい。黒いTシャツとレギンスのようなものが布の間から見えた。

「えっと、失礼ですが、どちら様ですか」

夢は本にしおりを挟んで営業用の笑顔で質問する。

「そこから来た」

少女は、道路を挟んで向こうにある学校の寮を指差した。

蘭生夢は困惑した。

恐らく、少女はどちら、という言葉に反応したのだろう。どこから来たのか、そう問われたと勘違いしたのだ。

「いや、えっと……あなたは誰なのですか、と尋ねているのですが」「ランって呼ばれてる」

「素敵なお名前ですね。蘭さんですか。名字は何でしょう？」

「名字？ そんなのないけど。ランはランだけど。動詞に名字なんてあるの？」

これは難敵だ。

この人が学校の生徒であることを怪しく思えてくる。いや、恐らく部外者だ。

「こんなに”抜けている人”はこの学校の生徒にはいない。皆強かで、狡猾だ。」

「何年何組何番ですか？」

「なにそれ」

試しにした質問で、真っ先に飛んできた言葉がそれだった。ああ、確信した。この人に関わってはいけない。本能で察した。

というよりも、最近は関わってはいけないような人物によく会うような気がする。

そう言えば、闇硝子と名乗った少年は今どこで何をしているのだろう。

「あ、ごめん、待った？」

背後で声がした。すごいタイミングだった。……闇硝子だ。

「遅いですよ、闇硝子」

「はは、ごめんごめん」

ランが闇硝子に文句を投げつける。蘭生夢は狼狽した。この二人

は、知り合いだったのか。

「では、これで失礼します」

蘭生夢はその場を立った。最後まで礼儀を忘れない姿勢は、最早身に付いて落とすことのできない呪いであった。

「待てよ」

腕を掴まれた。反射的に振り返り、何ですか、と叫んだ。

「この人がお嬢さんに、用があるってさ」

そうはにかみ、示した人物は、あのアカネだった。

少年より少し背の高い、すらっとしている彼女は、蘭生夢と目を合わせようとしない。特に会話したことはないが、いつもの様子と違っていた。

それよりも、夢は逃げ出したい気持ちでいっぱいだった。お昼の数学のノートの件は、忘れることができなさそうだ。

「ごめんなさい。急いでるから」

夢は口をきゅつと結んで、睨むような形で、アカネを見据えた。

数歩、歩いたところで、待って、と悲痛の声が聞こえた。

ゆっくり振り向くと、アカネが悲しそうな顔をして、蘭生夢を見ていた。

「謝りたいの……。あなたのノートを盗んだのは、私なの。ごめんなさい」

「アカネさんだったの。じゃあ、返してほしいわ。予習したいから」
「いや、そうかもしれないけど、そうじゃなくて……」

アカネが、選抜メンバーに選ばれた勇者が、もじもじと何かを呟きながら地面を見ていた。その光景は、滑稽で、無様で、なんだか、悲しかった。

蘭生夢は、罪悪感を感じた、というより、お昼の言いたいことが言えなかった惨めな自分を思い出し、複雑な気分になった。

「私は、あなたに酷いことをしたわ。ごめんなさい。取り返しは付かないけど、せめて、ちゃんと謝りたい。……ノート、返すわ」

アカネは、最後は泣きそうな顔で、それでも、蘭生夢をちゃんと

見た。

目があった。とてもやるせなかった。

アカネは、確かに犯人だった。だが、ここで蘭生夢がアカネを責めることはできなかった。

アカネは、自分のしたことを見つめ、認め、そして誠意を見せた。蘭生夢はそこに、一種の憧れと、尊敬を感じ取った。蘭生夢の求めていた強さがそこにあったからだ。

苛められている自分に、ここまでの勇気があれば。または、苛められることないように上手く立ちまわっていたら。……何かが変わっていただろうか。

「取り返しがつかないなんて、そんなこと思っていないわ」

蘭生夢は無意識に、しかしはっきりとアカネに告げた。

数学のノートをしっかりと受け取ると、蘭生夢は微笑んだ。純粋な笑みだった。

「確かに、今日のお昼のことは、とても傷ついた。でも、それより、アカネさんがこうやって私のところまで来てくれたのが、とてもとても嬉しいの」

言葉を必死で選んだ。例えそれが相手に伝わらないとしても、それでもいいや、という満足感があった。

アカネは、涙していた。己の不甲斐なさにか、それとも通じ合えた分かりあえた新たな友情に祝福してなのだろうか。

どちらにせよ、彼女たちは幸せだった。

※

それからアカネは、涙をふき、部活があるから、と爽やかな笑顔

で去っていった。

夢はそれを見送ると、心がとても軽くなった気がした。

「いやー、ハッピーエンドってやつかな」

「何照れてるんですか、闇硝子」

背後から2人の声がした。そうだ、忘れていた。このへんてこんな人たちのことを。

「……いつまでここにいるつもりなんですか。いい加減人呼びますよ」

「それは怖いね」

闇硝子はランと目を合わせて、とぼけて見せた。

見てると調子が狂う。

「おっと、自己紹介がまだだったけ」

「闇硝子と、ランでしょう。結構です」

「いや、お嬢さんの自己紹介さ」

はあ、と生返事をした。

「もう一度言うけど、お嬢さんはこの世界ではないもう一つの世界にあるとある国の王の末裔なんだ」

「よく意味が分からないんですけど」

「……まあいいや。お嬢さんの本当の名前はエリアルエルディア。エルディア王の1人娘で、最後の王族。オッドアイで、ロングウェービーの金髪。そして高飛車。それがお嬢さんだ。覚えていてほしい」

「はあ」

「とりあえず、今回は様子見ってことで。いきなりそんなこと言われても意味分らないよね。仕方ないね」

闇硝子がそう言うのと、夢の肩をポン、と叩き、じゃあ、またね、と言って去っていった。

「なんなのよ、あいつら……」

思わず口が悪くなってしまった夢だったが、これから起こることを想像して、寒気がした。

おそらく、彼らは蘭生夢を監視し続けるのだろう。

「ちょっと待ってよおおおおお!!」

彼女の悲痛の叫びは、彼らには届かなかった。

※

数日後のの放課後、蘭生夢は保健室にいた。

「へえ、顔の整った灰色の少年、ねえ」

カップに口をつけた女医が楽しそうに微笑んだ。

「あともう一人いるんです。髪の毛、瞳が真っ黒々の女子」

「すごいわね。いや、夢ちゃんも人種はコーカソイドだから、そんなにびっくりしてないけど」

「はは……」

夢は保健室で女医と話すのが好きだった。特別忙しい日ではない限り、寄ることが多い。

今日は文化祭の準備を少し抜けてきた。アカネとの信頼を結んだが、彼女は彼女で忙しいのだ。なかなかしゃべる機会はもらえなかった。

「でも会いたいなあ、その美少年美少女に」

「先生、美少年美少女とは言ってませんよ。確かに二人とも綺麗な顔立ちでしたけど」

「そう?」

「どちらかというと、少年のほうは、女顔で、少女のほうは凛々しい顔立ちでした」

「いいわねえ。私の好みだわ」

「先生、年齢を考えてください」

「いいじゃない。独身24歳。まだ楽しみたい盛りよ」

「そうですか……」

ふふ、と笑いあった。

蘭生夢も、確かに、彼らにまた会えることを少し期待しつつあった。

6. 校門前で試食会

文化祭一週間を控えた聖女子学園は、慌ただしくもどこか浮かれた雰囲気漂わせていた。

聖女子学園は金には困らない家の娘が通うところで、設備も教師の質も生徒の質も充実している。

満ち足りたこの学校の文化祭とは、それはとても華やかだ。

プロの楽団が演奏しに來たり、有名な作家が講演しに來たりする。また、文化祭らしく生徒の作った作品なども展示している。しかしどれもお金をかけているため、普通の文化祭とは規模が違う。

蘭生夢たち1年5組は模擬店をすることになっていた。中庭で野^{だて}点をするのだ。

クラスは複数の班に分かれてそれぞれ準備していた。

飯のかまどを中庭に設置し、赤いフェルトをカーペットのように敷く、道具班。

当時の金勘定をしたり、野点にかかる費用を計算したりする、会計班。

和菓子やお茶を立てたりする、料理班。

様々な舞台で宣伝やポスターを張ったり、当日の衣装を作ったりする、広告・衣装班。

蘭生夢のクラスは学年でも特に規模が大きく、校内から期待の聲が上がっている。

だが、蘭生夢は憂鬱な気持ちをかき消せられないでいた。

「うーん、だるいよ、お菓子なんて作れないよ」

調理室でエプロンをつけた夢は、和菓子作りにリタイア寸前だった。

「ちょっと、しっかりしてよ。一番楽な班なんだから」

「なんでアカネちゃんは料理班なのよう。力持ちだから道具班かと思っただのに」

アカネは女子にしては背が高く、エプロン姿もどこか違和感があった。

「私の親戚が老舗和菓子店なのよ。その知識を生かせ、と先生が仰ったの」

「確かに手付きが何だかプロみたい……」

夢と喋りながらも関わらず、作業の手が休まない。白あんを綺麗に丸めたものを数個作っていく。

「私もお手伝いはしているからね。小さい頃は絶対和菓子店を継ぐんだって思ってた」

「今は何になりたいの？」

「スポーツウーマン。体動かすのが好きなの。逆に夢は、何になりたいの？」

「うーん、特にないんだけどねえ……」

蘭生夢の頭の中にふと、彼らの影が映った。

別世界の王女。夢物語だが、どこか納得もいった。自分の2年前以前の記憶がないことや、しかもそれが生活に支障をきたさないほどの軽度のものであることや、不可思議なオッドアイ、実の両親の不在。これらを全て説明するには、何か壮大なバックグラウンドがあってもおかしくない。

それらを踏まえて将来の夢など語れるわけもなく、小さく、お嫁さんかな、と答えた。

アカネは乙女ねえ、とため息をついて、お嫁さんになるならちゃんと手際良く料理できないと駄目ね、と嫌味も言った。

作った和菓子——それは練り切りなのだが、数個持って帰って良いというお達しが出たので蘭生夢は自分の両親に分けようと箱に入れて帰ろうとしていた。

何度も箱を開けて充滿する甘い匂いを楽しんだ。帰ってからゆっ

くりお話ししながら食べよう。そうだ、運転手さんにも分けてあげよう。私のお手製を――そんなことを考えながら校門をぐりぬけた。

ぴたり、と足が止まる。

そこにいるのが当たり前かのように、闇硝子とランが立っていた。しかも、双方ばつちりと蘭生夢を見据えている。これではこっそり逃げられようにも逃げられなかった。

「甘い匂いがする、お腹すきました」

「や、こんにちは。お嬢さん」

狙ったかのように現れたファンシー二人組は、なんのためらいもなく蘭生夢に歩み寄る。

蘭生夢は危険を察知して、練りきりの入った箱をサッとカバンの中に押し込める。

がしかし、いつもの通り、闇硝子に腕を押さえられ、練りきりは悪魔の手に渡ってしまう。

「あッ、食べないでよ」

「練りきりだ、練りきり！」

箱を開けた闇硝子は、顔を輝かせながら言った。

「おいしそう」

ランも目を見開いて応答した。

「……練りきり、知ってるんですね」

蘭生夢は少し驚いた。この2人は日本文化など分かるとは思ってなかったからである。

「私は知らなかったけどね。闇硝子はとても記憶力がいいんだ」

ランが補足するように言った。

「練りきりは美味しいよね。誰かにあげるのかな？」

闇硝子が箱を閉じながら微笑んだ。そして、蘭生夢に渡す。

蘭生夢は困った顔をして、ため息一つついた。

「……差し上げます、まだ残りはありますし」

「えっ、本当に良いの!？」

飛びつくように箱に群がった闇硝子達は、美味しそうに練りきりを食べた。

そこで初めて”違和感”を感じた。

ランとは出会って間もないから分からないが、闇硝子の変化を感じたのだ。

思わず口にしてしまった。

「闇硝子……さんって、なんだかこの前とは別人みたいですね」

一瞬、沈黙が流れる。

なにかまずいものでも言ったかな、と思うが、闇硝子は「そうかな？」と言った。

今日の闇硝子はなんだか子供っぽかった。反応がいちいち仰々しくて、くどさを感じた。この前は不思議な雰囲気を書わせた冷たい人という印象だったのに。

「練り切りごちそうさまでした。ありがとう、お嬢さん」

「蘭生夢でいいわ」

「じゃあ、夢。ばいばい、またね」

そう言って、彼らは去っていった。

どこか、速足な気もした。

やはりあの言葉がいけなかったのだろうか。蘭生夢は深く悩むことになる。

自分の身の上と、彼の思惑に。

7. 謎に包まれたものたち

文化祭前日。蘭生夢たちの模擬店はほぼ完成していた。

あとは客への呼び込みをチェックするだけだった。

苦手だった料理も上手くできるようになり（もちろんアカネには及ばないが）、まずまずの充実感を感じていた。

夕方、それではお疲れ様、とクラスで締め、各々帰ることとなった。

夢はアカネとは仲良くなれたが、クラスの雰囲気は依然としてよくはならず、しおりはアカネの腕を引っ張る形で颯爽と帰ってしまった。

アカネはどうやらしおりの重鎮らしい。アカネと蘭生夢が一気に急接近したから、少し戸惑いを感じているのかもしれない。

赤く染まる夕暮れに、ふう、とため息ついて、校門を通り、角を曲がったところ。

やはり、というか、彼らがいた。

「またですか」

もはや予想は付いていた。彼らは相変わらずの格好で今来たという風に佇んでいた。

「そう渋い顔をするな。明日は文化祭らしいじゃないか。せっかくのお祭りだから、応援しに来たんだよ」

「はあ、ありがとうございます」

「はいこれ、前の練り切りのお礼」

そう言って彼が差し出したのは、一冊の本だった。

「これ、あげるよ。俺の一番好きな小説。ちよっと古めかしいけど」赤い、ハードカバーの本で、なかなかの重さだった。表紙は金の箔押しで豪華な装飾だった。まるで魔法の本みたいだ。

ページをパラパラとめくってみると、随分と小さい字がつまって

おり、どれくらいで読めるのだろうか疑問に思った。

「ありがとうございます」

とりあえず社交辞令は口にしたものの、この小説は一体なんなのだろうかという疑問は晴れなかった。

「『たがふみそめし、かたみぞか』……呪文みたいな題名ですね」

「一体誰が道を作るほどに踏み固めたのでしょうか、という意味だ。内容は貴族の少年が成長するにつれて変わる人生観を描いている。身分違いの女との恋愛もあるから、退屈はしないと思うよ」

あの練り切りのお礼がこんなたいそうなものでいいのか、と思ったが、彼がはにかんだので、夢は素直に受け取ることにした。

※

結局、あれからあまり話をせずに彼らとは別れた。

彼らには帰る家があるのだろうか。そんな風には思えなかったが、彼らを家に呼ぶ勇氣はなかった。

ランは、「練り切りおいしかった、また欲しいなあ」と言っていたので、今度は彼らのために作ろうかと思う。

そう思うと、自分の心に占める、彼らの存在がどんどん大きくなっていく気がして、駄目だ、と自分の心をなだめた。得体の知れない何かにやたらと干渉するのはよくない。

だが、どこかドラマチックな存在に陶醉しているのも明らかだった。

お迎えの車に乗って、帰路に付くと、車窓から景色を眺めた。夕日が音もせず、あの闇に消える。

明日は文化祭だった。今まではわりとどうでもよい作業と感じていた。

だが、今度は、期待と、一抹の不安を寄せていた。まるで、夜が来ることを怯えているかのように。

※

「ずいぶんと懐かしいものを、持っていましたね」

ランはそばに来て、そう話題を変えた。

夜になると、春でも寒い。このコートは丁度いい布団だった。

「ああ、あれは貴重な本だった」

「なんであげたんですか」

「蘭生夢は読書家だ。すぐにあれを読んでもくれるに違いない。そしてあれだけ存在感のある本だ、次会った時、いろいろとネタにしやすい」

「計算してるんですか」

「いや、してないよ」

彼らは銭湯の番台にいた。

数ヶ月前、ほとんど行き倒れのような形でこの銭湯に入ったところ、銭湯の主に気に入られ、今では住み込みで手伝いをしている。

主は、情が厚い江戸っ子というより、妻に先立たれ、子供も独立し遠くへ行った寂しいお爺さんだった。だからこそ、得体のしれない少年少女を招き入れたのだろう。

ランは、漫画を読みながら闇硝子に尋ねた。

「あの本は、小さいころ読んだけどさっぱりでしたよ」

その一言で、闇硝子は昔を思い出す。

「小さいころかあ、なつかしいなあ」

「私たちが孤児院にいた頃ですね」

「ああ、あの頃は楽しかった」

ワイワイと昔のことを話しながら、物思いにふけっていると、ランが急に

「……姉さん今頃どうしてるのだろう」と呟いた。

姉さんとは、ランの実の姉のことだった。2歳年上なので、今年で18になるはずだ。

幼いころはこの3人でよく遊んだものだった。

闇硝子は、ランの顔を覗き込み、ため息をついた。

「今頃、就職でもして、立派な社会人だろう。あいつ、すごく前向きだったし、誰でも優しくかったし、営業とか向いてるんじゃないかな。もしかしたら結婚してるかもしれないし」

確かに、姉さんは美人だった、とランも強くうなずき、幸せになつてほしいと願っていた。

「そういえば、あの本の出だしってなんでしたっけ」

「いきなりなんだ」

「最初のフリーズが、すごく心地よかった気がして。今思えばあそこしか理解できませんでした」

「あの出だしはな……」

※

「『――2人の親友と、そしてまだ見ぬ我が子に捧ぐ――』……」

「どうしたのだね、夢」

「なんでもないわ、お義父さん」

家にある、通称映画部屋で好きな映画を見ていたら、ふと思い出したフリーズだった。

今思えば、あの冒頭の1行は何だったのだろう。誰かに当てた物語だったのだろうか。

そこに、何かドラマがある気がしてならない。

そういう話は、大人の女性である女医に、明日聞いてみようと思った。

※

「で、どう思います？　なんだかとても素敵なフレーズだなんて思
うんです」

昼休み、保健室を訪ねるとすぐさま女医に話しかけた。

「あら、そういうの結構外国文学では見かけられるわよ。ちょっと
本を見せて」

女医に本を手渡した。

「いい装丁ね。きっと作り手はこの物語に沢山の思いを込めたので
しょう」

ぺらぺらと女医は本をめくった。

すると、あからさまに、顔色を変えた。

「夢ちゃん、この本、一体誰にもらったのかしら」

「えっと、この前の灰色の男の子です……」

何かまずいことをしたのかと、夢は怯える。しかし、女医はすぐ
に顔をなおし、笑みでその本を返した。

「うん、大事になさい」

一体、女医がどうしてあんなに顔色を変えたか、夢には分からな
かった。

もしかしたら、この本には何か秘密があるのかもしれないと夢は
思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6991p/>

阿修羅の内乱

2011年6月19日02時10分発行